

学生自ら外部資金を獲得

長浜市と連携し地域貢献の
成果を挙げる経験を積ませる

経済学部 教授 森 宏一郎

1. 学生自ら外部資金獲得に挑戦

専門演習において、学生たちに外部資金獲得のためのプロジェクト申請書を執筆してもらい、「環びわ湖大学・地域コンソーシアム」大学地域連携課題解決支援事業から外部資金を取得させた。教員が取得した外部資金を間接的に学生に使わせるのではなく、学生自らに獲得させる取り組みとしてスタートさせた。このようなケースはあまり例がなく、先進的と言ってよいのではないかと思う。

プロジェクト募集内容は地域連携であり、申請前に正式に長浜市役所の総務部政策デザイン課と連携した。もちろん、市役所との連携作業も学生自らが行き、市役所に訪問させている。なお、本事業で外部資金を獲得したゼミは、滋賀大学では彼らだけである。

学生自ら外部資金を獲得し、純粋に学生主体でプロジェクトを行わせる意義は主に3つある。第1に、学生に名実ともに責任を負わせてプロジェクトを実施してもらえることである。誰かに用意された枠の中で何かをやるというのではなく、自ら応募し公的なお金を使って、何かを提案しながらプロジェクトを実施するというプロフェッショナルな状況での経験を積ませることができる。

第2の意義は、問いも答えもない本格的なアクティブ・ラーニングを実現できることである。教員は資金管理窓口になっているだけであり、「公的なお金を使ってプロジェクトを行っているのだから、何らかの成果を出さないといけない」と繰り返し発破をかけること以外、

教員自身も本格的に学生を放っておけるのがよい。この状況下だと、学生は問いも答えも自ら作り出さざるを得ない。もちろん、何の助け舟も出さなかったわけではないが、後述する成果の中身について、教員は問いかけること以外にはほとんど介入していない。

外部資金獲得プロジェクトの第3の意義は、具体的な調査研究サイトに入り込んで人間関係を構築し、学生自らが関係人口として入り込む機会をつくれることである。長浜市役所だけではなく、サイトに頻繁に足を運び、地域づくり協議会の人たち、地域おこし協力隊、移住者、居住者とも連携していった。自由に使える資金がなければ、こうした連携を学生たちが実践することはできなかっただろう。

2. 地域貢献プロジェクトの内容

プロジェクトタイトルは「サステナビリティ・マップの創造—移住と関係人口を増やす景観・空き家・地域コミュニティ力の魅力発信」である。もちろん、申請書の中で調査研究活動の提案を学生にしてもらっているが、具体的な問いや活動内容は事前には全くの未知であり、チャレンジングなプロジェクトになっている。学生たちは、自分たちが何を問い、何に答え、何をやって何を生み出せばよいかがか全く分からない白紙状態からスタートすることになった。

したがって、プロジェクトの前半では、学生たちは長浜市をさまようことになった。よく言えば、長浜市の各所でフィールドワークを実践したということである。しかし、自転車を出掛けてきただけとしか思えないような日が続くこともあり、教員として厳しめに指導したこともあった。公的なお金を使っている意識が不足している点を指摘したり、具体的に成果が出ない日であっても、調査意図や目的を明確化して活動したり、将来につながりそうな情報収集をやっておかなければならないという点を指摘したりした。

上でやや厳しめのことを書いたが、学生たちの名誉のために書いておくと、学生たちは、通常の専門演習において、毎週、日本語文献1冊と英語文献10ページを読み、それらに関する課題提出を行いながら、週末や平日の空きコマを利用してプロジェクトに取り組んだ。このスケジュール自体が、学部学生にとっては、かなりチャレンジングだったに違いない。

学生たちは、長浜市の各所で情報収集を行い、田根地区・地域づくり協議会や同地区に居住する地域おこし協力隊の方々とネットワークを構築した。また、長浜市役所主催のまちづくりイベントに積極的に参加し協力した。

3. 地域貢献プロジェクトの成果

学生たちは収集情報やネットワークを駆使して、長浜市役所との協働を取り付けながら、移住促進のための移住者インタビューを10件実施した。その成果として、写真入りのビジュアルの良いインタビュー記事を作成し、長浜市役所が持つ移住促進発信サイト(smout)から公開した。本学HPの帯からも発信した。

なお、3回生中心にプロジェクトに取り組ませたのだが、3回生5人全員が記事を書き公開した。できる学生だけにやってもらうのではなく、「誰も取り残さないインクルーシブ教育の形」でプロジェクトを推進したことも付け加えておきたい。

十人十色の長浜ぐらし：滋賀大生の移住者レポートまとめ(記事リンク集)

<https://smout.jp/plans/11205>

本学からの広報記事

<https://www.shiga-u.ac.jp/11063/>



これらの記事が掲載されたSMOUTによる移住アワード2022(年間)で、長浜市が第2位(昨年のランク外から)となった。長浜市長が本プロジェクト活動に言及してくれている。

<https://lab.smout.jp/news/about-ijyu-award-202304>



記事作成にあたり、何に焦点を当て、何をとり上げ、それらをどのようにインタビューで引き出し、それをどのように書くか、その内容をインタビュー協力者とどのように合意形成するか等については、学生たちに全て考えさせて取り組ませた。何もないところに自ら道をつくる感じだったので、相当なプレッシャーとストレスがかかったと学生たちは言っており、実際にチャレンジングな取り組みだったという。



4. コロナ禍における実地活動の意義

コロナ禍にあえて、地域の人たちと対面でのように関わりながら、どのように実践的な成果を出していけるかを学生たちに模索させる試みだった。コロナ禍のライフスタイルを標準的に感じ、SNSなどのデジタル・コミュニケーションに慣れている学生たちにとっては大きな挑戦だったようである。学生たちはコロナ禍でも現場で具体的に人々と直接関わりながら、おもしろく調査研究を進める方策を学んだ。実際、地域おこし協力隊の巨大な古民家に寝泊まりして、地域の方たちと議論した。チャレンジングでありながら、実践的にかなりおもしろい取り組みだったと学生たち自身も言う。コロナ禍であったことによって、かえって、現場で具体的に課題解決活動を行うことの価値や重要性を深く実感することができたのではないか。コロナ禍にあえてアナログな試みによって、価値を創造できたのではないかと信じていたい。